

第8回門真市魅力ある教育づくり審議会 (第6回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成30年5月24日(木) 午後3時20分～午後4時40分

開催場所 門真市役所本館2階 第7会議室

出席者 新谷龍太郎、川村早余子、片山仁、中川智広

事務局 寺西教育部総括参事、三村学校教育課長、峯松学校教育課参事、牧菌社会教育課長、西中図書館長、向井学校教育課長補佐、今井学校教育課副参事、永田教育総務課主査

傍聴者 1名

議 事

新谷部会長

それでは、子どもの学ぶ意欲向上部会を開催させていただきます。まず事務局の方から議題についての説明をお願いいたします。

事務局(三村学校教育課長)

はい。今回の子どもの学ぶ意欲向上部会では、学校における英語教育の充実、及び公民協同による英語学習の充実について、討議をお願いいたします。討議時間は、先ほどありましたとおり1時間20分を目安とさせていただきます。現在15時20分でございますので、16時40分ごろまで討議いただき、その後10分間の休憩を挟んで50分には全体会にてまとめの報告をお願いしたいと考えております。

なお、討議の柱といたしましては、次第にもありますとおり4点ございます。1点目が、小学校英語の充実のための施策について。2点目が中学校英語の充実のための施策について。3点目が、社会教育課所管の英語学習事業の活性化方策について。4点目が、市立図書館を活用した英語教育の充実について。以上の4点で進めていただきますようお願い申し上げます。繰り返しになりますが、議論していただくお時間は16時40分をめぐりにしていただいて最後残り10分で意見の集約をお願いしたいと思っております。よろしくをお願いいたします。

新谷部会長

はい、ありがとうございます。それでは1点目の小学校英語の充実のための施策ということなんですけれども、いかがでしょうか。英語教育ってどのような感じで思っていますか。僕、ちょうど今、自分の子どもが小学校3年生で、英語教育に関わっ

たばっかりなんです。で、僕のいところがアメリカ人と結婚しており、英語に関心持つのかなと思ったんですけど、「どうだった？」って話を聞くと、「なんか、名前の説明した。」くらいで、なんかあんまり、どうなんかな、みたいな感じのスタートなんですけれども。片山委員いかがですか。

片山委員

私の娘が、現在、小学校4年生でありまして、来年度からのスタートになりますと5年生からになります。3年生、4年生も英語教育が一斉に始まることで、同じ学年の人たちとは同じスタートラインに立つわけですが、当然、2年下の3年生や4年生の子どもたちとは2年間のギャップが生じると思われれます。それが、中学校に上がった時の授業に影響がでるのではないかと、ちょっと心配になりました。

新谷部会長

なるほど。川村委員いかがですか。

川村委員

いいですか。私は、英語教育自体がどちらかというところと反対派で、英語を子どもに学ばせるぐらいなら、もっと子どもに、国語の力をというのが基本的なところで、多分自分が中学校の時の国語の先生が、英語にも多分長けてたんだと思うんですけども、桜の花がひとつ咲くにも、英語では「咲く」だけど、日本語には「八重咲き」「八分咲き」とか、いろんな言葉があると。そういう日本のいろんな言葉が、たくさん豊富にあるっていうことが、日本人にとってこれまでの豊かな心を作ってきた、みたいな。だからこそ、英語も大事だけれども、日本語も大事なんだよって言われたときに、本当にそうだなって思ったんです。

でも、その頃のいろんな日本語を、今使いこなせているかっていうと、やっぱりカタカナが増えてきて、英語ばかりであまり日本語に触れない、そしたらやはりそれが、コミュニケーションにもつながるのかなと思ったら、どうなんやろうって、ずっと思っていたんです。決して英語が悪いわけじゃないと思うんです。私の妹は、高校卒業してアメリカの大学に行っていたので、逆に言えば本当はそんな小学校の時から教科化しなくても、興味があったり何かがあって、そういう学びの場があれば、英語がちゃんと学べるし、発音もできるし、とか思ったりします。

私は大阪府のPTA協議会にも関わらせてもらっているんですけども、そこに教職員組合の方々がこられて、やっぱり英語科の授業に対する反対意見を文科省に持っていく、持っていかないというような話を受けたりするんです。そしたら、実際に教師の中でも、そういう問題があるのに、なぜじゃあ文科省は、っていう、もうほんとの根本のところから、私は結構、なんでやねん、なんでやねんという部分があるので、今日、ここの説明にもあったみたいに、教科化されても、本当に先生自体の指導力によって、ちょっと英語をかじっている先生と、そうじゃない先生とが同じ授業をしても、全く子どものリスニング、そんなのにもきっと差が出てくると思うし、と思ったら、すごく問題だらけで、本当にそれを子どもに一律に、教科化として教えていこうと思うと、すごく課題があると思います。

新谷部会長

わかりました。という意見がありますけれども、学校の先生、いかがですか。今回小学校の先生いらっしやらないのでね。いきなり中学校に飛びますけれども。

中川委員

僕の立場でどうしゃべったらいいのかちょっとわからないんですけれども、確かに門真市では、何年か前に中学校で英語特区というのを一度やって、やっぱりなかなかね、英語というのも大事だけれども、国語やら、他のところで、というような形で、まあ1回終わっているんですけれども、国で決まってしまったことですから、じゃあどうするんだということで、小学校の先生のお知り合いもいるので、聞くと、やっぱり混乱しかない感じですね。

川村さんのおっしゃったとおり、英語が得意な人も、もちろんいるんですけれども、多くの先生方は、大学で自分が英語を習ったことがありますけれども、英語を教えるということは、当時は小学校の教科になかったので。教え方としては習って来ずに、教師になって、だから「英語は手だけど、小学校の先生だったらできるわ、と思ったのに、英語を教えなければならない、どうしよう。」と言っておられる人とか、その中で、ある程度差ができて、中学校としたら、中学校1年生で本当はABCから、一から英語の先生がやるというところじゃなくなってくるので、私は今年からはすはなに転勤になったんですけれども、うちの中学校区では、小中の研修の中で、英語をどうしていくんだっていうのを、ちょっと今年、本格的に中学校の英語の先生も入れて、小学校の代表の人も入れて、やっていこうというのは進めています。

なかなか、そういうちょっとした場面だけじゃなくて、小学校の先生は本当に、英語を話せるプロが欲しいということで困っておられるようです。

これは、英語だけではなく、今日の議題とは、ずれますが、プログラミング教育とかがさらに入ってきて、どうしようと、聞く人聞く人、そんな感じです。

新谷部会長

なるほど、ありがとうございます。私自身のことをいいますと、高校の時に1年間ホームステイ留学をして、大学でも1ヶ月程留学して、英語の劇部にも入ってて、縁があってアメリカの調査にも行っています。

でも、今英語で自分の大学の授業をしてくれって言われたら、ちょっとできないですね。自分の能力の低さもあるんですけども、そもそもの自分が授業をする上での発問であったり、板書であったり、資料作りであったり、そういったところも踏まえて、それを英語で全部、タイミングとかを考えて、しかも学生の、英語での受容能力まで含めて考えないといけないとなると、ただでさえ今も授業で苦労しているのに、さらに英語でやったら、僕も不安だし、学生も不安だし、学生の保護者も多分不安になるかなというのが、まあ率直なところですね。

ですから、そんなに簡単じゃないですし、一朝一夕に英語の研修とかでできるようなものでもないかなっていうのが、僕の印象です。でも、英語で何かするととなると、何らかのやり方はあるのかなあと。

僕の個人的な印象ですけれども、英語はもう、完全に僕の中では体育なんですね。体を動かしてなかったら、なまってしまうので、僕はアメリカに1年に1回調査に行きますけれども、耳は残ってるんです。でもいざ自分でしゃべろうとなると、体動かしてなかったら、いきなりアメフトとかして怪我するのと一緒に、全然口が動かない。だからアメリカなどに行く3ヶ月ぐらい前から、毎日10分ぐらいは、大統領のスピーチとかを、暗唱というか、口で言ってみたりすることをずっとやるんですね。

そういうことから考えると、小学校でやるとしたら、週に1回、1コマでやるより、1日5分とか10分は口を動かすとか、そういうのを5日間ずっと続ける方が、何か効果あるのかなあとか、でもそれこそイベントとして、イングリッシュキャンプみたいな感じで、そこはお母さんとかお父さんも入って、英語だけ使ってカレーを作るとか、もしくは夏祭りのイベントで、英語フェスティバルみたいな感じで、屋台を出して、なるべく外国の方とかも来てもらって、英語だけでやりとりをするとか、何かそういう楽しみとしてやる分には良いのかもしれないですね。

でも、英語で授業するってなると、本業は、先ほど川村委員がおっしゃったみたいに、やっぱり基本となる思考力とか、国語の方が重視されなくてはいけないかなと思いますし、現場の先生もそこが一番不安なのかなと。なんで不安になるのかなというのと、1回授業でわからないというような印象を与えてしまうと、生徒との信頼関係が崩れるので、他の授業とか学級活動に影響するからじゃないかなと個人的には思いますが、いかがでしょうか。

中川委員

特に小学校の先生は、英語やりました。次の時間は同じ先生が違う教科をまたされるので、前の授業で英語が分からなかったっていうのは、双方にとってマイナスですね。

新谷部会長

まあなので、全部を先生で抱え込むという方向よりかは、学校外のいろんなリソースを使って、その中で英語に触れたりとか英語に関心持ってもらうっていう方向のほうが、生産的かなっていうふうに思うんですけども、学校教育以外の場面で、何かこう、子どもが英語に触れる機会っていうのはありますか。

川村委員

私、大分前の部会の時に話をしたサタスタ・まなび舎事業ですが、私は五月田小学校に関わっていて、サタスタは、大体週に1回土曜日にやっているんですけども、ほぼほぼ英語をしゃべれる方が来ていただいて、実はもう何年も前から、学習じゃないんですけども、英語に触れるという形で、遊び中心で、学年、男女別、その日によってなんですけども、別れてちょっと英語に触れるということを実はやっていて、もちろん学校の中でも英語も入っているので、子どもたちがやっぱり耳にしたり発声したりっていうのはあるんだと思うんですけども、最後には子どもたちがスピーチするんです。中学生顔負けですよ。私一番最初に聞いた時びっくりしました。自分の名前から、趣味とか好きな動物とか食べ物とか、自分はこうなりたいっていうのを英語で暗唱させるんです。

それを3・4・5・6年生がいるんですけども、それを聞いていて、その子たちに、来てくれているスタッフも、「なんて言っていたか分かる？」って聞くと。昔は本の音読をさせたりしていましたが、やはり耳に入っていたらなんとなく聞き取りができたりするんですね。そういうのを見ると本当に週に1回でも2回でも、英語に楽しく触れるだけでも、学ぼうという意志が子どもにもあれば。

だからこの新学習指導要領もそうですけれども、何を目的にというか、目標というか、どこにゴールを持って、授業をさせようと、指導要領が思っているのか、門真の教育が、英語教育が、子どもたちに、どこを目標にどこまでさせたいと思ったものをさせるのかとか、そういうのによっても、きっと変わってくるんだと思うし、外の力を借りて、少し何かっていうのも、あるんだろうなっていうのは思います。否定はしながらも、現実には。

新谷部会長

制度は利用しているということですね。

川村委員

一時は、この英語を入れ始めてもう5・6年になるので、その当時に子どもの英検を受けさせたらどうかってような投げかけもあったんです。で、私たち五月田小のサスタのスタッフで話し合いをして、私たちは点数をつけるために英語をさせたくない、まずは英語に触れる、自分たちがそれを言葉に発することができる。ずっとプラスのままの気持ちで続けていって欲しいという思いで、受験はさせない。もちろんその子が個人で受験をする、しないは別として、この事業自体としてそこに方向をもっていくのはやめようということ、5年間ずっとやってきているんです。それでもすごく素晴らしいスピーチをするので、本当に伝える側と学ぶ側がどう思うかで、すごく左右されるんだろうなと思ってます。

新谷部会長

片山委員、いかがですか。

片山委員

おっしゃるとおりですが、とりあえずは、中学校から突然始まっていた英語教育によって、拒絶感が出ているのを和らげるために、小学校から導入を始めようとしているのが目的じゃないかなって思っているんです。そのため、小学校からは、歌とか親しみやすいところから入ろうとしているんだろうなっていうイメージがあります。よって、学校の先生も大変だとは思いますが、まずは先生も拒絶せずに、英語の授業に慣れていただきたいなって思います。

新谷部会長

それはあるかもしれないですね。

片山委員

小学校の先生になって、いろんな教科も教えないとダメなのに、「その上さらに英語も」ってなるのではなく、「先生も一緒に勉強するわ」ぐらいの感覚で取り組んでもらえたらありがたく思います。

川村委員

それは、保護者のきちんとした理解と、それを許す環境が必要かもしれません。「先生何やってんの。英語教科化されてるのに、ちゃんと授業してもらわなあかんやん」という保護者が多かったら、先生も委縮してしまうから、始まったところやから、先生も大変やろうしががんばって私たちも応援するっていう、周りの考えが大事です。

片山委員

そういう気持ちが大変かもしれないですね。

川村委員

そこって難しいですよ。

事務局（三村学校教育課長）

委員の皆様方、正直今話を聞いていて、本当におっしゃるとおりで、「先生何をやってるねん」と言われても困るので、先程の話にもありました、市として英語指導員を7名配置している関係で、今日少し映像があるので、どんな感じで、実際に学校がやっているのかっていうのを、ちょっと見ていただいたらと思います。

—教員や外国語教育支援員による市内小学校英語授業の映像を紹介—

事務局（今井学校教育課副参事）

ではまず小学校3年生から。この方は外国語教育支援員さんという方で2つの小学校に行っていて、外国語教育支援員さんと担任の先生も一緒に教室にいて、英語教室で一緒に授業という形になっています。

支援員さんが「How many letters?」アルファベットは何個あると思う?というふうに英語で言ったんですけども、子どもたちからは、「あ、何個かってことか」という反応があり、そういう英語の質問に対しても、英語で答えるというようなやりとりをして、子どもたちはだんだん慣れ親しんでいくような活動をしています。

次にABCソングをご覧ください。

—教員や外国語教育支援員による市内小学校英語授業の映像を紹介—

事務局（今井学校教育課副参事）

ABCソングも、多分きらきら星のABCソングを皆さんは歌っていたと思うんですけども、今デジタル教材という形で各学校に配られているものには、このABCソングが入っています。これは「V」の発音がこの歌のままでいくと、「ヴィー」という発音がちゃんとできるような工夫もされています。

次は担任の先生が主導の英語の授業をご覧ください。

—教員や外国語教育支援員による市内小学校英語授業の映像を紹介—

事務局（今井学校教育課副参事）

はい。というのが3年生の授業なんですけども、担任の先生と支援員さんとで英会話というやりとりをして、子どもたちに想像させる授業であったり、スピーキングの授業を担当の先生と行っています。

次、これは5年生の授業です。

—教員や外国語教育支援員による市内小学校英語授業の映像を紹介—

事務局（今井学校教育課副参事）

このように5年生でも、担任の先生がかなり外国語の授業を主体となって活動されていて、支援員さんの助言をもらいながら一緒に活動しているという様子が見られるような授業になっていました。小学校は以上です

新谷部会長

何か他に今日提示いただく資料、例えば図書館とかも含めて、他にあれば今のうちに見せて頂いてから、討議に入ったほうがいいかなと思うんですけども、いかがですか。

事務局（三村学校教育課長）

あと、中学校での授業の様子がここに入っているんですけども。

新谷部会長

今ここで、中学校の方の授業も一緒に見せていただこうと思います。

事務局（三村学校教育課長）

では引き続きご覧ください。

—教員や外国語教育支援員による市内小学校英語授業の映像を紹介—

事務局（今井学校教育課副参事）

小学校と違うのは、外国語支援員さんではなくて NET、ネイティブスピーカーが隔週で各中学校の授業をしています。今見ていただいたとおり、英語科の教師が授業するのではなく、NET が主体となって、授業を進めております。今見ていただいたのは中学2年生の子どもたちなんですけど、来年度全国学力・学習状況調査においては、スピーキングのテストが入ると国からは聞いているんですけど、この子たちが中学3年生になってそのテストを受ける対象になりますので、こういう生の英語を聞いたり、しゃべったり、

やりとりをしたりというのが、次の学力調査に影響するのではないかとされています。以上です。

新谷部会長

はい、ありがとうございました。ではまず、中川委員、実際現場で、小学校と中学校合わせての議論ですけれども、実際のところどんな支援が必要なんだろうかな。こういう英語教育について。

中川委員

まず、小学校は教科書はあんな感じで、遊ぶというか、楽しくというような感じの教科書ですか。テストとかはないんですか。

事務局（峯松学校教育課参事）

テストはないですね。

中川委員

評価もつけないと。先ほど川村さんが言われたとおり、楽しく、スピーキングとかもできて、上がってきて、文法なり何なりっていうのもありながら、でも英語って面白いしっていうのがあるのと、小学校でテストとかされちゃうと、なかなか大変なのかなあと。あったとしても本当に簡単な、達成感を感じるような、僕できたよ、私できたよ、というかたちで。

事務局（峯松学校教育課参事）

文科省が配っている外国語教育の教材があるんですけども、この「Let's Try」というのが3・4年生用、1が3年生で2が4年生用で、この「We can」というのが、1が5年生で2が6年生で、このような教材を活用しながら今やっているんですけど、もしよかったらご覧ください。

新谷部会長

これ小学校で使われているものですか。

事務局（峯松学校教育課参事）

はい使っています。

新谷部会長

5・6年生でしたっけ。

事務局（峯松学校教育課参事）

「We can」が5・6年生で、1が5年生です。

川村委員

教科化されるということは、これに対してテストはあるんですか。

事務局（今井学校教育課副参事）

今はないです。

川村委員

教科になったらテストもある。

事務局（峯松学校教育課参事）

評価は必要となります。

川村委員

道徳だったら、先生のコメントのような形ですが、英語はそうじゃなくて、他の教科みたいに点数できちんと到達度を図るようなテストになるんですか。

事務局（今井学校教育課副参事）

今は記述式ですが将来的にはどうなるかは。

川村委員

2年後導入した時には、点数でつけられることになるかもしれないと。

新谷部会長

まず片山委員から伺いましょうか。授業の印象であったり、この教科書の印象はいかがでしょうか。

片山委員

すごくいいと思います。

新谷部会長

どちらがですか。授業のやり方でしょうか。教材でしょうか。

片山委員

授業のやり方もですし、教科書の感じも徐々に難しくしていっている感じがいいですね。

新谷部会長

川村委員いかがですか。

川村委員

難しいですね。授業をさっきされていた小学校にしても、まあ中学校はネイティブの方なので、どこの中学校行っても同じような内容になると思うんですけども、小学校に関しては、市内の全部の小学校で、先生はあのくらいのレベルで子どもたちに英語を教えているんですか。

事務局（峯松学校教育課参事）

支援員の先生が何年も前からおられますので、大分授業の手助けをしてもらいながら徐々に徐々にできるようにはなっています。

川村委員

その差があるとやはり中学校に行ってもだし、ここから教科化になって点数をつけたときに、やっぱり子どもたちが、どうなんですかね。

今見た授業はもちろん楽しいし、あのまま行けばいいのにとか、自分も学生時代にネイティブな人と喋るのが、なんかわけわからないけど一生懸命聞こうって、CとSの発音が違って何回も言わされたとか、いろんなことを今思い出しながら、何かそういうのが楽しいっていうか、そういう経験があればいいのかなと。

先生が必死になって授業どうこうというよりも、予算が付くんだったら、そういうネイティブを呼ぶとか、発音ができる人を呼んで、こういう楽しい経験をさせてやるということが、ひいては子どもが英語に向ききっかけになって、ひいては、喋ろうと思ったら文法も、となってくるから、遠回りのようで、実は子どもの意欲を高めることができるのかなと思いました。

教科化されて授業で教えるのかなとなったときに今の状況で、先生も差があつてという中で、授業というところに重きをおかないといけないのか、違う形で持って、子どもに英語の力をつけさせて、結果として中学高校にいたときには、力がついているというふうになるのか、またこれは観点が違うのかもしれないんですけども、難しい選択ですよ。

事務局（三村学校教育課長）

外国語の支援員が入ってもう長いので、教員も少しずつスキルアップは当然していると思います。少しずつスキルの習得や、やらなければいけないという気持ちは持っていると思います。

事務局（寺西教育部総括参事）

これまでは、5・6年で、外国語教育支援員が入っていて、今回は3・4年からまた増やしているので、それをやっている小学校の先生が、経験値も増えていっていると思います。

先ほどの映像で、One Two Three、しかも声がelevenから小さくならないで行けたというのは、中学校で英語の教室で見ていた者としては、素晴らしいと思いました。中学生は、すぐ声が小さくなりますから。中学校に入ったらまず分からなかったら恥ずかしいという気持ちが原因かなと思います。

思春期に入る前の、この時期にやるところが良いのでしょうか。

ですから、発音だけですけど、先ほどの話にもありましたがテストが入ったらどうなのか、みんなが均一の質を保てるのかということも疑問もありますが、先ほどの映像にもありましたが、中学生のように思春期で恥ずかしい、間違えたらいやだから、声が小さくなりがちですが、元気いっぱいになれるというのは、小学校の低学年・中学年ならではかなと、見ていて思いました。

川村委員

楽しいからやるということが、やはり基本ではないですか。と思ったらそれを評価されるようになってきたら、いくら小学生でも、子どもが国語とか算数でテストの点をつけて、自尊心がっていうところとかに行くんだったら、結局、小学校英語もそこに行きつくのかなと思ってしまいます。

片山委員

点数がつけられることを、「評価されてる」と思うのではなく、「どこまで理解できているのか」と思えるようになればいいのではないのでしょうか。

川村委員

最終的に何を評価するかによって、多分子どもの学び方っていうか、変わってくるんだと思うし、その求められ方で先生の指導のあり方も変わってくるような気がします。

新谷部会長

中川委員、何かご意見はありませんか。

中川委員

こうした支援は今後も継続すべきと思います。

川村委員

対象学年も広がったらいいですね。

事務局（寺西教育部総括参事）

学年は3年からです。以降措置の2年間については、何とか配置したいと考えています。その後のことについては、財政状況を踏まえなければなりません。

新谷部会長

僕はこの英語教育について、本当にいろんな人の意見が、絶対に一緒になることはあり得ないと思っています。英語の先生が話し合った時に議論が分かれます。どっちを先にするか。例えば、僕なんかはネイティブを小学校に入れた方が、逆にした方がいいと。外国語支援員を中学校に入れた方が、英語を使う必要性を小学校の時に感じられるからこそ、英語を学ぶ必要性を体験として感じられるって僕は思うんです。

でも違う考え方を持つ人もいらっしゃると思うので。この2年間の試行期にやっぱり調査とかしておいたほうがいいのではないですか。

例えば、ネイティブを小学校に入れた校区と、逆にネイティブを中学校に入れた校区、入れ込みをして、どう違うのか、測る指標も、楽しさという観点とか理解度とかそういったいろんなところで図ったりとか。あと、小学校の先生は、あのテンションですずっとやってたら倒れるんじゃないかなと思います。

中川委員

小学校の先生は元気だから大丈夫ですよ。

新谷部会長

ああ、そうですか。僕はあんなテンションで授業はできない、と思うのですが。それも大学の時にある程度英語をやりましたよという先生と、全く英語経験ありませんっていう先生で、どう違ってくるのか、とか。もしくは他の授業での授業力でどうなのかとか、その辺も含めて、ちょっと今のうちに数字を持っておいた方が、これから展開していくときにどういう研修が必要なのかとか、どのような入れ方が必要なかっていう判断材料になると思うので、あまりやいのやいの言われない今のうちにやっておいた方が良いのではないかと思います。

中川委員

研修でいうと、やっぱり個人的な気持ちですけども、もし私が小学校の教師だったらというところで、私の年齢よりも上の方は結構しゃべるのに自信がないと思います。

自分が中学校でも、どちらかというスピーキングもちょっとありましたけれども、私は理科ですし、高校でも大学でも論文を読む、大学ではもう、実験の論文を読むための勉強みたいな。さらに上に行くと実験した研究を発表しなければならない。

そこで英語の授業が増えたりもするんですけども、大学院とかであるんですけども、どっちかというと先に論文を読まなければならないという、ただ読む、リーディングとかライティングの勉強を主にしてきた年代と、もうちょっと僕より若い、中学校でもこういうスピーキングやらリスニングやら増え出して、自分も中高とやってきた、大学でもこんなのがあったよという先生とでは自信が違うでしょう。

やはり子どもたちには、正しい発音というか、それがちゃんと身に付いてる方がいいんじゃないかなとなってくると、自信持ってしゃべれないといけないと思うので、その辺りの差はあるのかなと思います。

中学校の英語の先生は本当にうまく話すという、なんか偉そうな感じがしますが、上手だなというところで、NETの先生がいらっしゃる授業でも、同じようにずっと最初から英語でばーっと進んでいって、参観していると、ああそうか、今これする時間かという感じで、子ども達も慣れていて、これを言われたら、これするという型ができてるようですから、新谷先生がおっしゃるようにNETの方が中学校ではなく小学校に配置されるということも確かに面白いと思いながら聞いていました。

新谷部会長

僕の子どもが通っている校区はそうなんです。ネイティブを小学校に配置しているので全然考え方が人によって違うと思うんです。

さて、時間もありますので、次の議題に行きますが、次の議題がもう一緒にやってしまったらいいと思うんですけども、社会教育の所管の学習事業と市立図書館の活用という所なんですけれども、まず KEIK ですか。これは学校側としてはどんな認識なんですか。これは応募者数はある程度増えていってるということですか。プレゼンテーションコンテストの話ですか？

片山委員

KEIK とプレゼンテーションコンテストの事業は別ですよ。

新谷部会長

ちょっと違うんですね。めざせ世界へはばたけ事業と KEIK ですね。

私も今大学で地域のセンターと共同して、地域のイベントなんかの告知をお願いしますと言われるんですけども、かなり良い関係を作れていると思っているんですが、それでも学生にいざ、イベントに行つてねという段階になると、なかなか動員が難しい。という事情があると思うので、そういうことも含めてこの KEIK が学校現場の中で、どのように認知されてどのように児童生徒に呼びかけられているのかなと思うのですが、先生方がどういう認識を持っているのかなというところを聞かせていただけますでしょうか。中川委員はいかがですか。

中川委員

中学校が関わっている、めざせ世界へはばたけ事業は、参加した、特に進んでオーストラリアに行ったことがある生徒は、帰ってきて、経験が全然違うというか、今の高一の学年の子が卒業式の答辞に入れるくらいの経験を積んできたという話をしてくれたり、もともとリーダー的な子どもでしたが、ますます、英語だけではなく、色々と声をかけていったりとかいうところで、行って、すごく子どもは成長したなあと感じました。

先ほど説明にもありましたけれども、去年オーストラリア行った子どもが、今年の子どもにアドバイスというか、そういうのがすごく自然な感じで、自分らもそうやってしてもらったし、もう高校生になつてるんですけども、わざわざ土曜日とかに、高校生も忙しいんですけども、教育センターに来て、今年、プレゼンコンテストに出場する子どもたち前でこうだよああだよと言っている姿を、たまたま隣の体育館でクラブの試合をやっていた時に見たのですが、すごく、先輩から後輩へのつながりを持って子どもたちが頑張っている姿がいいなあと感じています。

新谷部会長

実際どれくらい知られているんですかね。制度としては。

中川委員

中学生はみんな知っています。

新谷部会長

一応知っていることは知っている。

中川委員

もちろん英語の授業の中で、どうするとか、学年によっては出たい人というよりはと
りあえず授業の一環でもあるので、何か総合学習をやった後に英語で言ってみようとか、
英語の授業の中でね。

めざせ世界へはばたけ事業に関しては、中1・中2が対象ですけれども、中学3年生
になっても、修学旅行に行きました、では修学旅行の思い出を3つ、英語でみんなの前
で言ってみようとか、英語の授業の中で、先程のような感じで組み入れたりします。ま
た、学校では〇〇先輩がオーストラリア行くねんで、みたいなのもあるので、中学校は
本当に、みんな知っています。

新谷部会長

なるほど。実際お子さんいらっしゃる皆さんはどうですか。

川村委員

興味なしです、うちの子は。親は興味津々ですけど。

新谷部会長

親は興味があるけど、子どもは興味がない。

川村委員

やっぱり世の中を知るって、こんな機会があるって恵まれてるん違う？って。だから
こそ行くか行かないかは別として、受けけたらとか、当時実際に行った子が近所にいた
りして、私も知ってる子何人か行っているの、その子らにどうやったと聞いたら、め
っちゃ行ってよかったわ！というのをわが子に直接伝えてもらったりとか、絶対行くべ
きやでって言っても、興味ない。

中川委員

その興味の部分が、先程の小学校の段階での楽しさで、中学校に入って単語テストだ
なんだというよりは、すごいなあという方がメインになるのであれば、小学校の授業も
いいんじゃないかなあと。それがつながっていけばよりそういうのが広がっていくのか
なと思うんですが。

新谷部会長

片山委員いかがですか。

片山委員

同じく、意識の高い子と低い子ではかなり温度差があるように思います。現在、私の
息子が中3になりますが、中1と中2の時、夏休みの宿題でこのコンテスト用に学校へ

応募しました。宿題という形で応募したため、中1の時も中2の時も、学校の審査で落ちてしまい、コンテストに応募すらしてもらえなかったという噂は聞いています。そんな話を聞くと、子どもはもう全く興味を示さない。結局は、先生からの評価が良くないと応募すらしてもらえず、はなから無駄だと思っていたようです。周りの友達を見ても、応募してもらえた子や審査に通過し研修に参加できた意識の高い子は、さらに英語を学習し、コンテストに備え切磋琢磨するみたいです。

川村委員

それでどんどん上に行く。

片山委員

そうなんです。だから、どんどん差が開くんです。

川村委員

だから引き上げる事業ですね、多分これは。もともと下を引き上げるというよりは、上の方の。

片山委員

そう、もともと意識の高い子を。

川村委員

そうそう、それをさらに上に飛躍させてやるための事業ぐらいの感覚かなと。

片山委員

感覚ではありますが、私も同じくそう思います。必ずしも、ボトムアップを図るような事業ではないというイメージです。

宿題で提出させているにしては学校から応募された総数が少なすぎますし、17年度はコンテストの一次審査である書類選考の通過者が63名、二次審査の面接で18人まで減らされていますよね。できれば、学校からの応募数や、コンテストの審査数、通過者の数をもっと増やしたらどうなんだろうかと。せめて学校からの応募者数の半分とまではいかなくとも、3分の1ぐらいは、一次審査に通してあげて、そこで少しでも意識を高めてあげられたらいいのになぁと思います。学校から応募さえしてもらえず、応募してもらえても一次審査でいきなり人数を減らされてしまうと、落とされた子どもは、もう諦めてしまう。

中川委員

いきなりだいぶ絞られますね。確かにね。

片山委員

そうなんです。それで、審査を通過した人は、学習に力が入り、研修会に参加できたりと、ますます意識が高まっていくみたいなんです。一方、早々に落ちてしまった子は

全く意識が飛んでしまい、興味をなくしてしまうというのが課題じゃないかなと思います。

新谷部会長

この事業の問題点というか、改善点として、やっぱりすごく個人主義になってしまいますよね。もともと英語に関心がある家庭であったり、英語も頑張れる子どもに対してすごい資源が集中しているんで、何か学校枠みたいなのを作って、人と協力して何かしないといけないみたいな選出方法があったほうがいいんじゃないかなと思います。

例えば英語劇をやってみるとか、地域に出かけて英語でショッピングをしてみるとか、何か学校としての取り組みを一つアピールした上で、あと学校の中で誰を行かすかっていうのは自分たちで決めればいいと思うんですけども、人と協力して何かをするっていう力がホントは英語のコミュニケーションの上にあるはずなんです。

そのための英語なので、英語でスピーチするという事だけで、個人を選出するのは、あんまりそぐわないんじゃないかなあと。それよりも人と協力して何か目的を持っていく、で、この授業の目的はやっぱりリーダーシップの育成であったりとか、縦のつながりをするっていうのがやっぱり強いので、人を個人にあてるよりかはちょっと学校枠みたいなのを作って、みんなで頑張ろうやみたいな感じで、関心のある人を高めていくとか、裾野を広げないとサッカーとかと一緒に、野球とかもそうですけども、憧れになって行かないといけないと思うんですね。

あいつやってるからいいやんみたいな感じになるんじゃないかと。なんかそういうふうにお金を使えたらもうちょっとこう、意味があるのになあという感じで今伺っていました。

すいません、お時間はあと何分ぐらいあるんでしょうか。

事務局（三村学校教育課長）

後、20分ぐらいですね。

新谷部会長

20分ぐらいありますか。図書館の話をちょっとしておかないといけないので。図書館は何か、説明が必要なこととかはありますか。もう資料とかは大丈夫でしょうか。

事務局（西中図書館長）

資料は先ほどお渡しした分で全てとなります。

新谷部会長

では映像とかも特にありませんね。

事務局（西中図書館長）

先ほど説明させていただいた取組以外に、図書館として今やっていることの中で、子どもたちが本を読むきっかけになればということで、学校に出向き、空き教室を利用して、本の表紙が見えるように面展台上に絵本や写真集など300冊ぐらい並べまして、友達

と話をしながら本を読んだり、床にマットを引いたところで本を読んだりというふうに、自由に本を読んでいいよ、というコンセプトの「えほんのひろば」を開催しています。

そのえほんのひろばの中にも、最近では英語の本も並べさせていただいて英語に触れる機会ということで提供させていただいております。

新谷部会長

実際に来る前に行けばよかったなと思ったんですけども、図書館とかでご覧になった事はありますか。

片山委員

ないです。

川村委員

そもそも質問していいですか。こういう英語を図書館に求める方の声ってたくさんあるんですか。

事務局（西中図書館長）

求める声というのは聞いてないですが、先程のおはなし会につきましても 24 年から開催いたしまして、そういう英語のお話し会をやりましていうのを広報とかで周知させていただきますと、やっぱり保護者の方々がすごく興味を持っておられてて、本当に小さい 3 歳とかの子どもさんを連れて、お父さんお母さん同伴で来るというふうになっていて、やはり興味を持たれているのかなと思います。

川村委員

これをする事で、図書館に来る利用者は増えた。

事務局（西中図書館長）

そうですね。行事の機会に本を借りて帰られたりとか、また次回、別の日に図書館にということで、図書館の利用促進ということもつながっているかと思います。

新谷部会長

どうなんですかね。僕も英語の絵本を子どもに読ませたいなと思って行くんですが、いざ図書館に行ってみると、結構手に取らないんですよ。英語の漫画とかも入っているっていう話ですよ。どんなものが入っているんですか。

事務局（西中図書館長）

漫画は、サザエさんとかドラえもんとかアンパンマンの英語で書いてある漫画も置いております。後は紙芝居も置いてありますし、絵本で有名なはらぺこあおむしの英語バージョンとか、トーマスとかミッフィーとかのものについても英語のものを置いております。

新谷部会長

ちなみにそういう漫画は、何点位かわかりますでしょうか。

事務局（西中図書館長）

具体的な数は、今はちょっとお答えできないです。すみません。

新谷部会長

DVD とかもあるんですかね。

事務局（西中図書館長）

DVD も置いております。そんなにたくさんではないんですけど。

片山委員

実際、図書館もしくは図書室に、英語の本が置いてあっても、子どもだけで行って、借りるっていう事はまずないと私は思います。親にそういう意識があって、子どもに読ませるか、親が借りてきて子どもに読ませる、というような形でないとなかなか難しいのではないかと考えます。

ただ、英語図書のコーナーがあること自体は悪いことじゃないと思っています。実際、中3の息子から聞いたんですが、日本語をほとんど話せない子が同じクラスにいてるみたいでして、その子との会話は全て英語になるらしいです。日本語を理解できない子は日本語の本を借りず、英語の本を借りると思うんです。なので、今まで日本語しかなかった図書館や図書室に比べると、英語の図書があるところは、グローバル化が図れていると思います。そういう方たちのためにも、英語図書のコーナーがあることは非常に良いことだと思います。

新谷部会長

これは僕の勝手なアイデアですけれども、なんか英語の本を読むということより、英語の本に囲まれることで、英語空間という演出のための環境構成に使ってしまったらいいのかなあとと思います。

だから、イングリッシュカフェみたいな感じで、3時から5時ぐらいは。お金払っても行くじゃないですか何するわけでもないけれども、だべる、みたいな。でも英語ね、みたいな。何かそういう環境作りに周りを英語でバーッと固めてしまったりとかするとか。

あと、お話し会ってというよりは、アメリカの幼稚園は多国籍なので、英語しゃべれない子とかも多いんですけども、SHOW&TELL みたいな感じで、何かを持って、英語でこれは何々だよ、と説明するとか、何かそういう風な環境作りのために一つ、英語の本を使うっていうのはあるかなというのが一つと、後は、DVD を実際日本語で見るかもしれないんですけども、英語だけしかない DVD、日本語訳がない DVD とかで、特に幼児が見るようなアニメ、ジョージとかなんか、そういったものの点数を多くしておくとか、自然と耳に入っている状態になるとか、もうちょっと DVD を増やしてもいいのかなというのがあります。

画もドラゴンボールとかも入れて欲しいかな。英語で。やっぱり自分たちが知っている物語を英語で見るとっていうようにしておいたら、中学生ぐらいだったら読むかなあってという感じがします。

川村委員

何となく単語がわからなくても、イメージがついたら読み進められますもんね。

新谷部会長

そうですね。話はわかってるし、まあ借りるものもないけど、とりあえず図書館に行ってあれを借りとくかみたいな感じですね。

お時間、後 10 分ぐらいありますでしょうか。ざっと流しましたけれども、実はあまり触れてない話がありまして、ちょっと議題の 1 及び 2 にかかるんですけども、先生の研修という所なんですね。ちょっと触れずに来ましたが。先ほど年代別の研修が必要なんじゃないかなあみたいなのところがありましたけれども。

中川委員

そこは小学校の先生には聞いてないから、現実には分かりかねますが、自分が小学校の先生なら、ずっと人前で英語を話してきた経験は少ないので、自信ないなと思います。

それこそアルファベット、日本語で文法を教えるんだっただけですが、きちんと発音できるかとなると、先生も自信がなければ声も小さくなり逆効果になるなと思うので。

新谷部会長

例えばどのような研修があったら現場の先生は良いと思いますか。そもそも研修はいらないかもしれないですが、現場の先生の、今の英語教育に対する不安を解消するために、どんなサポートがあったらいいと思いますか。

川村委員

それって現場の先生から声は上がってこないんでしょうか。そういう聞き取りみたいな事はしてないんでしょうか。

事務局（三村学校教育課長）

いろいろな声は当然聞いていますけれども、今の働き方改革の中で、果たしてどれぐらいまでできるのかなというところがあります。

川村委員

実際に現場の先生たちはどういう研修をしてほしいという声があるんでしょうか。

私たちがいくら考えたところで、それが本当に現場の先生がやって欲しいという研修じゃなかったら、それは多分実になって来ないと思いますし。

新谷部会長

だから別に研修じゃなくても、研修に使うお金でサポートができるんだっただけ。

川村委員

私だったら、聞き取りとか、先生自身がネイティブで喋って、聞き取れる、そこに対して答えられるとか、先生自身もその自信がちょっとでもつけば、きっと子どもに対しても発音してみようかなあとか、ちょっと英語でしゃべってみようかなとかってなるような気がするんです。

まさに経験のない先生たちに英語を教えろというのは、何も知らない子どもに授業を教えるというのと一緒かなと思ったら。

新谷部会長

片山委員がおっしゃった、先生自身が英語に対する抵抗感をなくすっていうのは面白いなあと思って、先生だけの英語キャンプとかあってもいいかなあとか。

事務局（三村学校教育課長）

大阪府教育庁もこのことは課題にしている、研修を当然組んでおりますし、それに門真の教員も参加しています。例えば、門真市の中でも英語教育のリーダー的存在を養成し、府の研修を受けてそれをさらに市で広めるといった取組も行っております。

後はやはり、教員はいずれ自分が教えなければならないという意識を持っておりますので、そのニーズに対しての研修は門真市教育センター中心として、多すぎないように厳選をしながら、かと言って、しっかり力をつけられるような研修を実施していきたいと考えているところです。

中川委員

やっぱり、やらないとしかたないのはどんなものでもそうなので、基本、じゃあどうすれば子どもたちに教えられるのかっていう気持ちを持っている先生ばかりなので、だからこそ焦るといふか、拒否すれば焦りもしないですが、そういう先生はいないので。

新谷部会長

正直、やっぱり一番困っていらっしゃるのは、先程のビデオもそうですけれども、自分たちで一から教材を作るっていうのは本当に手間ですよ。だから本当に効果的なこういう教科書とかデジタルツールがあるんだったら、その研究をして、できるだけ現場の教材開発の時間を少なくして、かつ、子どもたちが乗ってくるような英語教材の発掘とかを支援する方が、多少は楽になるのかなと思います。

それで、そのアプリなり教材なりを使った授業のあり方などの研修とかだったら、すぐに使えて楽かなあと思うんですけどもね。もしくは、そういう英語を使った授業の交流会をして、ネタの交換をすとか、そういう時間の方が、大学の先生を呼んでやるよりは建設的かなと思います。

事務局（寺西教育部総括参事）

英語に特化して言えば、今言われている研修とか教材開発という部分と、子どもたちの幅広い興味関心を喚起するきっかけ作りという部分があります。絵本であったり KEIK であったり、めざせ世界へはばたけであったりという、その子どもたちがその子どもたち

なりのレベルというか、英語の興味づけの中でやってみようかなってというようなチャンスみたいなものたくさん作ってあげることが大切だと考えます。

新谷部会長

今おっしゃったようなところで KEIK とかの教え合いとかにもつながるんですけども、英語教育の中ではかなり有名な田尻悟郎さんという関西大学の方がいらっしゃって、プロジェクト X とかのビデオにも出ておられますけども、その方がやってらっしゃるのはとにかく中学校3年間で覚えなきゃいけない単語のリストであったり必要事項っていうの事前に渡しておくんですね。

それに対して生徒自身が定期的に目標がどれくらい達成できたかっていうのを確認する期間があって、ある程度の目標まで達成できた生徒は他の生徒を教える資格を得るわけですね。そういうふうに教え合いの文化を作っていくっていう形で、全部が全部先生が英語で説明をするというよりも、英語を使って教え合うような空間を作っていくような方に持っていくないと、先生もしんどいかなと思います。

それで、この田尻悟郎さんがこの授業の形態を思いついたのは、この田尻悟郎さん自身がネイティブの方と授業する中で思いついたということなので、そういう授業のあり方の研究も、されたらいいのかなというのと、先ほど川村委員がおっしゃった英語嫌いにさせないということが一番大事で、私立学校で東大とか出している校長先生とかに話を聞くと、とにかく東大でも何でも、一番大事なのは高校2年生の夏までに英語嫌いにさせないことだと言います。

そこからは追い込めるから。でも英語がダメだということを高2ぐらいまでに植え付けてしまうと、もう何をやっても無理だと。でも大学受験には必ず英語が必要だと。だから何とか嫌いにさせないというのが一番大事にしておかなきゃいけないところかなと思います。先生も英語嫌いにならない。

事務局（三村学校教育課長）

今日の説明の中にあつた DREAM というのは、指導案という、先生がこうやって授業流せばいいよという型を一定、府教育庁も研究して作成した教材です。今日の映像にもありましたが、それも現場でやっていたりするのです。英語支援員の方々も一緒になって教材を前にもたくさん貼ってあつたと思いますが、教室を英語環境にするためのツール作ってくれています。確かに部会長のおっしゃるとおり教材を一から考えることは大変な作業です。今後、その点についても一層考えていきます。

川村委員

支援員の方が横にいてくれるかどうかというだけでも、先生の安心感って私は違うと思うんです。そう思ったら、やっぱりそこは人だから、予算も考えて、そういうところを考えるのが一つかなと思うんですね。全然違うと思いますよ。それで1年間やったら、その先生も1年一緒にやってたらなんとなくノウハウとか、いろいろな自分のスキルも上がると思うし、ずっとじゃないにしても、せめて1年はついてっていうのを順繰りにずっと回していけば、自信がついた先生が増えていくかもしれないし、先生が1年で授業きっちりやるのはしんどいんじゃないかなあと思います。

新谷部会長

確かにね、その支援員の方とやる中で、自然と吸収するっていうのは確かにいい学び方ですよ

川村委員

だから支援員じゃなくても、例えばそれこそ、この英語のプレゼンに行った子どもたちがもう今大学生になったりしているじゃないですか。で何人か、卒業するぐらいの歳の子どものもいると思いますが、やはり英語に関わっているっていう子どももいるんですよ。そういう子どもとか、地域に住んでいるネイティブな英語圏のしゃべっている人をちょっとゲストティーチャーに呼んで授業に入ってもらおうとか、そしたら先生が発音に困ったときに、ネイティブが発音してくれたら、子どもの耳にも入るし、ちょっと、子どもって、先生ってなると本当に授業っていうので聞くから、そしたら授業で成り立つと思います。

見ている保護者も授業なのに、なんで子どもに力がついてこないの、とかってなるから、そういう遊びものの要素も入れながら、英語を楽しく身につけさせているというようなことを、アピールすることも大事でしょう。

そういう外の人材で、先生が、学校が、少しハードルを下げて、外部人材に入ってもらおうことも、私だったら、私がいきなり授業しろっていきなり言われたら、ちょっとしゃべれる人が横にいてたら、ちょっとは楽になります。

片山委員

かなり楽ですよ。

新谷部会長

人がいると楽ですよ。

川村委員

それも先生の能力云々とかではなく、経験ないことをいきなり今からやれと言われたときに、その安心感があるのとないのとでは、授業の進み方も全然違ってくるんじゃないかなと思うんです。

新谷部会長

あと、川村委員がおっしゃったように、めざせ世界へはばたけ事業で表彰されたというか、選ばれた人がまた現場に戻ってくる、何らかの形で戻ってくるっていうのは良い循環ですね。もしできたらいいなと思いますねこれ。

いい感じでまとまったんじゃないかなと思います。お時間ですかねそろそろ。まだ大丈夫ですか。

中川委員

ちなみに、この小学生向けの KEIK は、無料ですか。

事務局（牧菌社会教育課長）

KEIKは有料です。10回で5,000円になっています。

中川委員

ということは1回500円ですか。1回がワンコインくらいということですね。一般のところに行くよりかは安いと思います。

新谷部会長

あと、このアルファというのは、どんな団体なんですか。事業委託されているということですけども。学校と連携をしているんですか。

事務局（牧菌社会教育課長）

学校の外国語教育支援員の方にもアルファの方がいらっしゃいます。

川村委員

アルファの方が支援員で行っているわけじゃないんですか。

事務局（牧菌社会教育課長）

そうではありません

川村委員。

じゃあ支援員っていうのは、個別個別で。

事務局（三村学校教育課長）

アルファに加入されている方が、教育委員会の選考を受けて、支援員となって頂いている例はございます。

川村委員

アルファに所属はしてないけれども、喋れて指導できるという支援員さんもいますか。

事務局（三村学校教育課長）

もちろんいらっしゃいます。

新谷部会長

何人ぐらい、人材としてはプールされていらっしゃるんですかね。この方々、このボランティア団体がもう少し活動してくれるんだったら先ほどおっしゃったようにもっともっと支援員をたくさん展開できるかもしれないなあと。

事務局（牧菌社会教育課長）

少し古い資料なのですが、平成26年（2014年）の資料では、その時は11人となっています。今は増えているかもしれませんが。

新谷部会長

そうすると、なかなか、たくさん大規模に展開するというわけにはいかない人数、規模ですよ。他に委員の皆様、何か言い残したことはありませんか。

片山委員

実際、KEIK には私の娘も参加していました。しかし、今は参加していません。先ほどにもありましたように、有料ということもあって、費用対効果を考えてしまうんです。お金をかけて参加させ、効果があるのか、意味があるのかっていうところで、あまり魅力がないと判断し、やめさせました。お金を取るからには、魅力のある講座もしくは活動を期待したいところです。

事務局（寺西教育部総括参事）

私も何度も見に行っておりますが、KEIK の活動はアメリカの行事をかたどっているとかいうのがあって、それをきっちり子どもが理解をしていたら、ハロウィンの趣旨などがわかるような形になっていると感じました。小さいお子さんならば、なぜ今こんな物を作っているのだろうと理解できず、面白くないかもしれないけれど、それがわかるとアメリカの1年間の行事を追いながら、英語も教えてくれるという内容だなと思っています。

新谷部会長

あと、海外の学校とかの交流とか、そういう人たちを呼ぶとか、そんな形は考えられませんか。

川村委員

ホームステイみたいなね。ただし、あっても。受け入れが大変かも知れませんが。

事務局（三村学校教育課長）

ホームステイとまでは言えませんが、今年度から、ようこそ門真へ国際交流事業という事業を始めます。これは、外国からの教育旅行とか修学旅行生と門真の子どもとを交流させる事業です。最近海外から日本に教育旅行という形で子どもたちが来るが多くなっており、市内の小学校・中学校に招き、イベントと申しますか、一緒に授業をしたり、交流会を行ったりする予定です。また報告できる機会があればと思います。

川村委員

まだ実際にはやっていないのですか。

事務局（三村学校教育課長）

まだ実施はしておりません。現在受け入れ校等についても計画中であり、今年度中には実施致します。

事務局（寺西教育部総括参事）

その事業をとおして、門真の子ども達が、海外の子ども達と英語で話し、また話したいなという気持ちを培いたいと思います。

川村委員

きっとそう思うでしょう。それが一番と思います。授業云々よりは。

事務局（寺西教育部総括参事）

そんな思いがあって、子ども達の意識が勉強の方に向いてくれればと考えております。

事務局（三村学校教育課長）

そうやって小学生の時に英語でのコミュニケーションに興味を持ち、中学生となってめざせ世界へはばたけ事業に参加してもらいたいのです。はばたけ事業で自信を持った子どもがたくさんいるのです。引っ込み思案だった子どもが英語でプレゼンを行い、みんながすごく褒めてくれて、それからずっと伸びていった子どももおります。こうした流れをつなげていきたいと考えております。

新谷部会長

はい。大体まとめて報告できそうな感じがしますので、締めに入りたいと思います。本日の議題、行ったり来たりしましたが、大体網羅できたかと思っておりますので、この後の流れについて、説明をお願いいたします。

事務局（三村学校教育課長）

はい。本当に長時間ありがとうございました。議論していただきました意見につきましては、概要という形で、この後の全体会で新谷先生の方から報告いただいて、審議会の委員全員で共有をしていただきたいと思います。この後、休憩をはさみまして、その後、全体会を始めますので、集合していただきますよう、よろしく願いいたします。本当にありがとうございました。